

毎日の授業や子どもとの接し方に悩む若い先生たち。
こんな小さなきっかけから子どもが変わります。

授業の導入は……

京都女子大学教授 よしなが こうし 吉永 幸司

1 発表の勢いが萎える

その授業は、調べたことを発表するところが目標でした。山田くんは、最初に発表することが決まっていたのでしょいか、休み時間のうちから何度も原稿を読み返し、授業の始まりを待っていたのです。チャイムが鳴り、授業を始めるあいさつの後、

「今日は発表でしたね。今日の発表は……。」

という言葉が終わらぬうちに、教壇の方へ進もうとするほどでした。発表に賭ける勢いが伝わってきました。

しかし、勢いを止めるように、「では、発表の前に、前の授業の復習をしましょう。まず、話す時に気をつけることです。次に、聞く時に気をつけることです。」

と、前の授業の復習から始まりました。指導案で計画したようになめらかに進まないで、予定の時間を大幅に超えてしまいました。あまりに長々と続いたものですから、山田くんは集中力を欠いてしまいました。ですから、

「じゃあ、発表は山田くんからですね。どうぞ。」

と指名を受けたときは、渋々発表するようには見えませんでした。待つのに疲れてしまったのでしょう。山田くんの発表に賭ける勢いは見えませんでした。

「前の時間の復習」という活動が、発表しようという意欲や勢いを萎えさせてしまったのです。

2 子どもが目を輝かすとき

授業の導入段階で、「昨日どんな勉強をしましたか。」という働きかけをしていたときのことです。発表をするのが特定の子になっていることに気がつきました。

「昨日の勉強を思い出しましょう。」と働きかけても、挙手する子は数人、しかも、毎時間とも同じ子どもです。では、挙手しない子は分かっているのかというと、そうではないのです。あまり関心がないのです。そのことに気がついて、指導案から、「前時の復習」という活動を省いたことができました。

と話をして、元気になります。

このとき気がついたのは、幼児はその時々瞬間を、高齢者は過去をエネルギーにしているということでした。つまり、それぞれの世代によって、エネルギーになるものが違うという発見でした。これは、子どもを見る目を変えてくれました。

子どもが関心をもっていることや、日々の会話などを聞いていると、「先週の体育はおもしろかった。」より「次の体育は何をするの？」であり、「昨日の給食」の話題より「明日の献立」を話題にして盛り上がっているのです。子どもは、未来に目を向けています。子どものエネルギーは未来に向いているのです。とりあえず、「この前は」から始める導入は控えましょうと提案したい気持ちです。子どもは、前の時間の成果を未来のエネルギーに変えるたくましさをもっているはずですから。

授業の始め、つまり、導入のときに、「今日は、第二場面の音読から始めましょう。」

「今日の勉強は、物語の山場です。どんな話し合いになるか楽しみですね。」

「授業の終わりには、上手な作文が書けるようになるですよ。」

という言葉から始めたのです。その内容は、これからの学習の方向を示すものであったり、目標の到達状況であったり、ときには、

「昨日の感想を紹介します。この感想は、今日の勉強と関係しますから。」

と前置きをして、授業の方向を示すノートを紹介したりしました。すると、それまでは関心がないように見えていた子が、体を乗り出して話を聞いたり、うなずいたりしたのです。

「昨日は」と「これから勉強するのは」という、ほんの少しの違いですが、勢いが違うのです。

先に述べた山田くんの場合でも、「山田くんは、今日一番に発表だね。いい顔をしている。きつとよい発表になるよ。」

3 子どもは未来

と言つて発表させていたら、きつと張り切つて発表したでしょう。もし発表がうまくいなくても、

「昨日の学習を、しっかり考えなかったからだろうな。」

と、自分から学習の至らないところを振り返り、失敗を力に変えるエネルギーにしていたらどうなるかと思うのです。

少しの期間、民生・児童委員を引き受けて、高齢者や幼児とかかわったことがあります。そのときに学んだことは、幼児は目の前のことに強い関心を示し、高齢者は過去の出来事を話題にする勢いが生まれる、ということでした。

高齢者に話題を広げようとして、「来月の集まりにいらっしゃいますか。来月の予定は……。」

と言っても、反応はそれほどありません。しかし、

「先月の集いは楽しかったですか。そのときの弁当は……。」

と切り出すと、口の重い人でも生き生き